



日台国際協働学習プログラムの運営と課題 : 令和2-4 年度国立台湾大学英語研修実践報告

木原, 恵美子 ; 李, 昆達 ; 李, 宥霆 ; 鄭, 如珊 ; 陳, 宜宏 ; 王, 若嵐

(Citation)

大學教育研究, 32:191-204

(Issue Date)

2024-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100488368>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100488368>



日台国際協働学習プログラムの運営と課題 ー令和 2-4 年度国立台湾大学英語研修実践報告ー

Collaborative Online International Learning (COIL)
between Kobe University and National Taiwan University 2020-2023

木原 恵美子 (神戸大学 大学教育推進機構 准教授)
李 昆達¹ (国立臺灣大學 生化科技學系 教授・系主任)
李 宥霆² (国立臺灣大學 教學發展中心 學習促進組 組長・國家發展研究所 副教授)
鄭 如珊³ (国立臺灣大學 學習規劃辦公室 執行長)
陳 宜宏⁴ (国立臺灣大學 教學發展中心 學習促進組 副組長)
王 若嵐⁵ (国立臺灣大學 教學發展中心 學習促進組 專案規劃師)

要旨

本稿では、令和 2 年度から令和 4 年度に実施した国立台湾大学研修（実施機関：神戸大学、パートナー機関：国立臺灣大學, National Taiwan University, NTU）の実施報告と、日台国際協働学習プログラムでもある本研修の改善を目指した考察を行う。過去 3 年度分の質問紙調査結果や参加学生からの本研修に対するフィードバックを分析した結果、神戸大学生にとって本研修は上級レベルの英語学習や海外留学準備の一助になっていることが明らかになった。一方、本研修に参加しても単位授与されない国立臺灣大學生に対しては研修の最初から最後まで継続して参加するための動機づけを強化するための仕組みが必要であることがわかった。海外の大学機関と学習プログラムを共同運営する場合の単位授与制度の整備や修了書発行の重要性を改めて確認したい。

1. 本研修の概要

まず、国立台湾大学研修は、平成 30 年度より神戸大学大学教育推進機構国際コミュニケーションセンターと国立臺灣大學教學發展中心學習促進組が共同運営しているオンライン

¹ 平成 30 年度から令和 3 年度に国立臺灣大學教學發展中心學習促進組組長として国立臺灣大學側で本プログラムを担当した。

² 令和 4 年度より、李昆達教授に代わり、国立臺灣大學教學發展中心學習促進組組長として国立臺灣大學側で本プログラムを担当している。

³ 平成 30 年度から令和 2 年度に国立臺灣大學教學發展中心學習促進組副組長として国立臺灣大學側で本プログラムを担当した。

⁴ 令和 3 年度より国立臺灣大學教學發展中心學習促進組副組長として国立臺灣大學側で本プログラムを担当している。

⁵ 令和 4 年度より国立臺灣大學教學發展中心學習促進組專案規劃師として国立臺灣大學側で本プログラムを担当している。

国際協働学習プログラムである。神戸大学では全学共通授業科目「Advanced English (海外研修)」(1.0 単位)として毎年後期に開講され、神戸大学生には単位授与されているが、國立臺灣大學では単位授与されない国際学習プログラムとして運営されている。平成 30 年度と令和元年度は本研修最後に神戸大学の教員と学生が國立臺灣大學を訪問(3 月上旬、3 泊 4 日)し、現地で國立臺灣大學主催のワークショップに参加したが、令和 2 年度より全日程をオンラインで実施している。(1) が本研修で行う全活動⁶である。(1b-d)の学修時間は 45 時間になるように設計されている。

(1) a. Google Form より参加申込(8 月上旬締切)

海外旅行・海外滞在経験・留学生との学習経験の有無、英語能力試験(TOEIC, TOEFL, IELTS など)のスコア、志望動機を確認

b. 学内研修 4 回(各 2 時間)実施

研修開始前(9 月末)、キックオフミーティング(國立臺灣大學と合同開催 10 月上旬)、研修中(1 月上旬)、研修終了直前(2 月中旬)

c. 神戸大学生と國立臺灣大學生が 3-4 名のグループを組み、グループ内でオンラインディスカッション(英語)を 10 回実施

- ディスカッション準備 60 分
- ディスカッション 60-120 分
- ディスカッションの議事録作成と振り返り作業 30 分
- ディスカッション 10 回分の学びをビデオ(5-10 分)製作

d. ワークショップ(3 月土曜に開催、日本時間 10:00-18:00)

オンラインディスカッションを午前と午後の 2 回実施
昼休み中もご飯を食べながらお互いの大学や地元を紹介
ワークショップ後にアンケートに回答

(1) には図 1 で挙げられている 4 種の活動が含まれている。図 1 における I 学習者による振り返りは(1c)と(1d)、II 質問紙調査は(1a)と(1d)、III 客観テストは(1a)、IV パフォーマンス評価は(1c)にそれぞれ相当する。本研修の成績は(1b-d)に基づいて評価され、(1a)の学習者に関する情報は、神戸大学生と國立臺灣大學生をグループ編成するときに利用される。

⁶ 本研修で収集されたデータが研究目的のために利用されることについて、全参加者より合意書が提出されている。特に(1c)については、理論言語学の観点から分析され、書籍 1 冊、国際シンポジウム発表 1 報、国内学会発表 3 報、学術論文 3 本(うち 2 本印刷中)として報告されている。

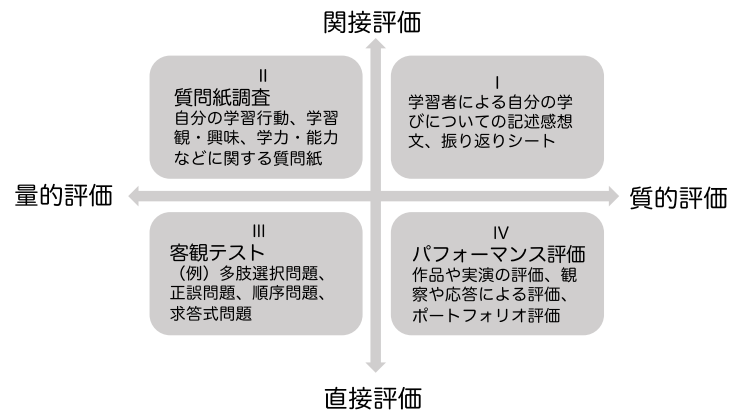


図1 学習評価手法の分類

出典：松下（2019）

本研修の参加者数は神戸大学では年々増加している。特に、令和2年度以降は毎年10%程度増加している。一方、國立臺灣大學の参加者数は神戸大学の参加者数に合わせて毎年調整されている。

表1 神戸大学生の参加者数

	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
1年生	0	1	0	7	8	9
2年生	4	4	5	4	3	4
3年生	1	2	4	3	4	3
4年生	0	0	3	1	1	1
修士生	1	1	1	0	1	2
博士生	1	1	1	0	0	0
合計	7	9	14	15	17	19

表2 國立臺灣大學生の参加者数

	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度
1年生	3	3	11	9	7	4
2年生	1	10	4	9	11	7
3年生	1	5	6	7	12	7
4年生	2	0	7	2	3	6
修士生	0	0	0	1	0	2
博士生	0	0	0	0	0	0
合計	7	18	28	28	33	26

平成 30 年度から令和 4 年度は国立臺灣大學から本研修に応募する学生が 30-60 名ほどいたため、国立臺灣大學からの要望もあり、神戸大学生 1 名：国立臺灣大學生 2 名というグループを編成することで、できるだけ多くの国立臺灣大學生を受け入れた。

それでは次節より、令和 2-4 年度の過去 3 年度分の神戸大学研修生が提出した本研修応募時の質問紙調査、神戸大学研修生の英語外部試験スコア、ディスカッションの内容、そして両大学生に対する研修後の質問紙調査を順に確認し、本研修の改善点を探る。

2. 研修前質問紙調査

本研修応募時に神戸大学が神戸大学生に対して実施する質問紙調査では、①海外旅行・海外滞在経験・留学生との学習経験の有無、②英語能力試験 (TOEIC, TOEFL, IELTS など) のスコア、③志望動機を確認している。本稿では令和 2-4 年度 (コロナ禍 1 年目から 3 年目) の海外渡航歴と英語能力試験スコアについてとりあげる。

まず、令和 2-4 年度参加者の本研修参加時点での海外渡航歴を表 3 にまとめた。

表 3 令和 2-4 年度参加者の研修参加時の海外渡航歴

令和2年度		令和3年度		令和4年度	
学年	海外経験	学年	海外経験	学年	海外経験
2年生	サンフランシスコ1週間 現地校通学 (中1)	1年生	ロシア・ハバロフスク1週間 交流事業 (高1) YFUエストニア7か月 留学 (高2)	1年生	海外渡航歴なし
2年生	海外渡航歴なし	1年生	ニュージーランド3ヶ月 留学 (中3)	1年生	海外渡航歴なし
2年生	イングランド2週間 学校の研修 (中3) 台湾、タイに旅行	1年生	海外渡航歴なし	1年生	海外渡航歴なし
2年生	中国5日間 学校の研修 (高1)	1年生	オーストラリア6年	1年生	海外渡航歴なし
2年生	グアムに旅行 (小学校)	1年生	海外渡航歴なし	1年生	海外渡航歴なし
3年生	フランスに旅行 (大1)	1年生	アメリカに旅行 (小学生)	1年生	台湾4日 学校の研修 (高2)
3年生	ニューヨーク2週間 語学学校通学 (高校)	1年生	サイパンに旅行 (5歳)	1年生	海外渡航歴なし
3年生	シンガポール5日間 学校の研修 (高1) シンガポールアジアサイエンスワークショップ1週間 (高2) ワシントン大学研修1ヶ月 (大1)	2年生	海外渡航歴なし	1年生	中国 学校の研修 (高校) 中国、台湾、オーストラリアに旅行
3年生	アメリカ 語学留学 1ヶ月 (高校、大1)	2年生	オーストラリア2週間 語学研修 (高2)	2年生	ロンドン2週間 留学 (高2)
4年生	オーストラリア5週間 英語研修 (大学) ウガンダ5週間 インターンシップ (大学) マレーシア4日間 研究発表会 (大学)	2年生	海外渡航歴なし	2年生	海外渡航歴なし
4年生	ハワイ3泊5日 ラオス約10日 マレーシア1ヶ月 シンガポール3日 オーストラリア2週間 タイ4日	2年生	オーストラリア11日間 (高2)	2年生	オーストラリア10日間 研修 (中学) 香港、台湾、イギリス、ハワイ、オーストラリアに旅行
M1	海外渡航歴なし	3年生	オックスフォード大学研修1ヶ月 (大学)	3年生	マレーシア 修学旅行 (高校)
M1	ロンドン短期留学、ヨーロッパ1周、アジア1周、 その他ハワイ、サイパン、グアム等	3年生	マレーシア・クアラルンプール1か月間 語学研修 (大1) 英国ブルネル大学 研究発表 (オンライン)	3年生	オーストラリア1週間 語学研修 (高2) アメリカ1週間 大学見学 (高3)
D3	スウェーデン5日間	3年生	フィリピン2週間 ボランティア (大1) アジアに旅行1ヶ月 (大1) 香港への帰省	3年生	海外渡航歴なし
		4年生	海外渡航歴なし	3年生	ボストン大学2週間 留学 (小6) 台湾 修学旅行 (高2)
				4年生	海外渡航歴なし
				M1	オランダ10ヶ月 留学 (高専3)

まず、令和 2 年度 (コロナ禍 1 年目) の神戸大学研修生の多くは本研修参加前に様々な海外経験を積んでおり、「海外渡航歴なし」(2 名) および「海外旅行経験しかない」(2 名) 参加者の割合は 28.6%であった。しかし、コロナ禍 2 年目になると、「海外渡航歴なし」(5 名) と「海外旅行経験しかない」(2 名) 参加者の割合は 46.7%に増えた。そして、コロナ禍 3 年目になると、「海外渡航歴なし」と「海外旅行経験しかない」参加者 (9 名) の割合は 52.3%にさらに増えた。この「海外渡航歴がない」「海外旅行経験しかない」参

加者の増加傾向は今年度（令和5年度）でも見られる。ただし、令和5年度と同割合は42.1%であるため、コロナ禍2年目の状況より少し改善されたが、コロナ禍1年目と比較するとまだ多い。今後も本研修を継続実施していくことで、海外渡航歴がない・海外旅行経験しかない神戸大学生に対して国際交流の機会を提供していく必要があると思われる。

次に神戸大学研修生の英語外部試験スコアを確認する。表4は研修生が応募時に自己申告したスコアである。各種スコアを一切持っていない場合は「未受験」とし、異試験のスコアを複数申告した場合（e.g. 英検1級とTOEFL ITP 623）はそのまま表4に記載した。

表4 令和2-4年度参加者の英語外部試験スコア

令和2年度	TOEIC	TOEFL	英検	IELTS	未受験	令和3年度	TOEIC	TOEFL	英検	IELTS	未受験	令和4年度	TOEIC	TOEFL	英検	IELTS	未受験
1年生	-	-	-	-	-	1年生	550 805 810 845	ITP 467 ITP 517 ITP 590	準1級	-	-	1年生	670 715	ITP 512 ITP 530 ITP 547 ITP 623	準2級 2級 1級	-	-
2年生	595 640	ITP 540 iBT 74	準1級	-	1名	2年生	680 885	-	-	5.5	-	2年生	735 820	-	-	6.5	-
3年生	500 605 960	iBT 82	準1級	-	-	3年生	810 880 770	-	-	6.0	-	3年生	-	iBT 63 iBT 70	-	5.0	1名
4年生	700 955	-	-	-	-	4年生	940	-	-	-	-	4年生	750	-	-	-	-
修士生	-	-	-	-	2名	修士生	-	-	-	-	-	修士生	850	-	-	-	-
博士生	-	-	-	-	1名	博士生	-	-	-	-	-	博士生	-	-	-	-	-

表4からわかる通り、本研修には毎年TOEIC 860以上やTOEFL ITP 600以上のスコアを持つCEFR C1レベルの神戸大学生が参加している。このため、本研修は全学共通授業科目の英語アドバンスト科目としての役割も目標通りに果たしていることがわかる。

英語学習については、本研修後も英語学習を続けて、TOEIC：790, 820, 870, 900, 905、TOEFL ITP：537, 553、TOEFL iBT：78, 86, 102、IELTS：6.5, 7.5、英検：準1級, 1級を取得した神戸大学生もいる。また本研修後に交換留学に参加する学生もいる。その行き先は、The University of Washington（アメリカ）、ESSEC Business School（フランス）、Vienna University of Economics and Business（オーストリア）、Cardiff University（イギリス、トビタテ！留学JAPAN 12期生、交換留学後 The University of Edinburgh の大学院進学）、Institut National des Science Appliquées de Lyon (INSA Lyon)（フランス、交換留学後 Ecole Polytechnique de Paris (Economics for smart city and climate policy) 進学）、Universität Basel（スイス）である。これより、本研修は海外留学準備の一助になっていることもわかる。

本稿ではとりあげないが、研修参加前の質問紙調査では志望動機や国立台湾大学生とディスカッションしたい内容も確認するため、学生の学習行動、学習観、興味もわかる。それらと海外渡航歴（表3）や英語外部試験スコア（表4）を踏まえると、神戸大学研修生は主に以下の4パターンに分類される。

- (2) a. 学部卒業までに交換留学を希望する学部1-2年生

- b. 海外の学生と英語でアカデミックな議論がしたい学部生・院生
- c. 英語のスピーキング力を伸ばしたい学部生・院生
- d. 英語力を実践的に向上させたい学部 4 年生・院生

(2) のように、本研修には学部 1 年生から大学院生までが同時に参加するため、下級生（学部 1-2 年生）が上級生（学部 3 年生以上）のプロジェクト運営を間近で学べる環境になっており、国際交流だけではなく、異学年・異学部の交流の場にもなっている。

3. 学習者による振り返り

本研修では、神戸大学生と国立臺灣大學生が 3-4 名のグループを組み、Personal-Local-Global issues をそれぞれ最低 3 回ずつディスカッションするように教員が推奨しているが、さらなる詳細はグループ内で学生が自由に設定する。学部 1-2 年生にとってグローバルイシューを英語で議論することは難しいようであるが、学部 3 年生以上になるとグローバルイシューばかり議論するグループもある。

表 5 は各年度の参加者（神戸大学生）により報告されたディスカッショントピックである。

表 5 令和 2-4 年度参加者が実施したディスカッションのトピック

令和2年度 参加者		令和3年度 参加者		令和4年度 参加者	
回	トピック	回	トピック	回	トピック
1	自己紹介と今後の予定	1	自己紹介と今後の予定	1	自己紹介と今後の予定
2	Autism	2	日台の食文化	2	日台の食文化
3	幼児教育	3	コロナ禍の生活	3	日台の教育制度
4	待機児童と児童虐待	4	台湾における日本文化	4	日台観光地紹介
5	メンタルヘルス	5	メンバーの出身地紹介	5	食糧廃棄
6	SDGs GOAL 2 Zero Hunger	6	SDGs GOAL11 Sustainable Cities and Communities	6	Gender Equality
7	日本と台湾に対するイメージ	7	SDGs GOAL11 Sustainable Cities and Communities	7	SDGs 海の問題
8	理想の町	8	SDGs GOAL 13 Climate Action	8	SDGs GOAL 1 Zero Hunger
9	女性差別	9	SDGs GOAL 13 Climate Action	9	SDGs GOAL 4 Quality Education
10	お互いの趣味について	10	SDGs GOAL 4 Quality Education	10	今後の学生生活

大部分のグループが表 5 の令和 2 年度（表左）と 4 年度の参加者（表右）のように、まずは身近なトピックや興味があることからディスカッションする。しかし、近年は「海外の学生と SDGs について英語で議論したい」という希望を持つ学生が増えており、令和 3 年度（表中央）と 4 年度（表右）の参加者のように SDGs 関連のトピックを何度も選んでディスカッションするグループが増えている。

1 回のディスカッションの流れは、情報収集-スライド作成-プレゼン-質疑応答-ディスカッションという流れにするグループが多い。発表者が1人の場合もあれば、グループメンバー全員が発表する場合もある。また、発表者の他に、ファシリテーター、タイムキーパー、書記（議事録作成）の役割がある。ディスカッションを60分は続けるように教員が指示しているため、最低でも60分間は実施されるが、話が盛り上がったときは120-150分ほど行われる。そして、3名グループの場合はディスカッションが60-90分、4名グループの場合は90-150分間実施されることが多い。

ディスカッションが終わったら、神戸大学生は議事録を日本語と英語で作成し、①神戸大学生限定の日本語 Facebook グループ（非公開）と②国立臺灣大學生と共同運営している英語 Facebook グループ（非公開）に投稿する。(3) は表5の令和4年度参加者の6回目のディスカッションの日本語の議事録である。

(3) ディスカッションの開催日と時間：12/1 20:00-22:00

ディスカッション開催場所：自宅

ビデオ会議アプリ：Google meet

録音アプリ：Google meet

ディスカッショントピック：SDGs GOAL11

今回は、“GOAL11の都市と人間の居住地を包摂的、安全、レジリエントかつ持続可能にする(住み続けられるまちづくりを)”についてのディスカッションをしました。自分の関心分野だったので私が事前に以下のようなテーマ・質問を準備し、それに答える形で発表を行ってもらい、私がそれを組み込みながらGOAL11について、特に交通についての発表を行いました。

【メンバー2人をお願いした発表テーマ・質問】

1. 世界で住みたいと思う都市を紹介してください。(特徴を定義して、なぜそれが良いのかを説明する)
2. “私たちの社会はGOAL11を達成する為に何に価値をおくべきか？”を紐解くための質問
3. GOAL11を達成する為にどのような要素が最も大切だと思いますか？
4. 居住地を決めるときに何を重視しますか？
5. 台北の都市の何が好きですか？
6. 台北の都市の何が嫌いですか？

【自分の発表】

GOAL11についての概要

「開発」という概念の進化-経済的、環境的、社会的側面

GOAL11のための基礎的な要素-GOALを経済、環境、社会のファクターに分けるワークを通してGOAL11が包括的である事を学ぶ

交通について-社会的(e.g. 交通権)、経済的(e.g. 時間価値)側面とポジティブな側面(e.g. クリーンか、安全か、経済的か)、日本の都市のトレンド
台北について-成長期の都市、それに伴う社会問題、市町村の合併

今回のディスカッションはかなり準備した甲斐もあり楽しかったです。メンバーAは住みたいと思う都市で軽井沢を紹介してくれました。その理由の一つに東京から1時間40分にあることを挙げてくれました。同じ距離で、台北から東岸にある都市まで2時間40分かかることも示してくれ、自分の発表で交通の重要性を伝えたいと思っていたので良かったです。着眼点が鋭いので議論させてもらえます。GOAL11は包摂

的で、GOAL 11 を通して他の目標にアプローチできる事を伝えたかったのですが、それができたと思います。それぞれの GOAL を経済、環境、社会のファクターに分けるワークで GOAL 11 がどのファクターに属するのかを議論したとき、メンバーA が経済、メンバーB が社会、自分が環境を選んで、全ての GOAL の中で唯一、三人とも意見が別れ、そのときに GOAL 11 が包摂的なのだなと理解してもらえたような気がします。来週は台北の町をライブストリームしてくれることになり、再来週に GOAL 11 の続きとして台北の町づくりについて議論していく予定です。

このように議事録では、ディスカッションの概要や学びだけではなく、困っていること、助かっていること、感謝すること、印象的だったことも報告するため、教員が速やかにトラブルシューティングや助言を行えるようになっている。また、Facebook グループ内には過去の研修生もいるため、先輩から後輩へコメントが書き込まれたり、先輩が後輩のディスカッションに飛び入り参加することもある。

ディスカッションが終わるたびに神戸大学生は (3) のようなディスカッションの概要、学び、次回の準備などを Facebook で報告することにより、学生がどのような学習経験を積んでいるのかを教員だけではなく全参加者がお互いに逐次把握できるようになっている。ただし、学部 1-2 年生が投稿する議事録では、自身が懸命にディスカッションに取り組んだことは述べられるが、学びを冷静に振り返って次回への改善策を見出す振り返り作業が弱いことが多い。これに対して、学部 3-4 年生になると、振り返りに基づいて修正を繰り返し、ディスカッションの質を上げる努力を毎回続けることで、研修後に達成感や充実感を味わう学生が多い。もちろん、学部 1 年生でも後者のような学びを積み重ねる学生や学部 4 年生でも振り返り作業が少ない学生も数は少ないが毎年いる。しかしながら、個々の学習スタイルは、英語外部試験スコア、海外経験、グループワーク経験、今後の目標の明確さとゆるやかに相関していることが多く、特に学習効果は今後の目標（英語外部試験で高ストア取得や海外留学計画）の明確さの影響を強く受けるように思われる。

4. 学生のパフォーマンス

学生は毎回のディスカッションを Zoom や Google Meet で行い、録画し、ビデオデータを教員に提出する。そのため、教員は提出されるビデオを見ることで、学生のパフォーマンスを確認できる。議事録の内容が薄い・語数が少ない学生はディスカッション中も発言数が少なく、議事録の内容が濃い・語数が多い学生は発言数が多い傾向がある。また、発言数が多い学生の英語力は研修を通じてまたは研修後に飛躍的に伸びることが多い。たとえば、(3) の議事録を作成した学生は研修前後で TOEIC スコアが 810 から 900 に上昇した。

また、提出されたビデオデータについては、学生が英語の議事録を作成するときに学生自身が見直す時にも利用される。学生の中には、ディスカッション中に英語を話すことに専念しすぎると、自身やメンバーが何を話したのかをしっかりと記憶やメモに残せず、あ

とで議事録が書けなくなることがある。そのようなことを防ぐためにも、毎回のディスカッションの録画を推奨している。

5. 研修後の質問紙調査

毎年研修最後に国立臺灣大學がワークショップを主催するが、その時に国立臺灣大學が全参加学生に対して自己評価（5段階評価）と本研修に対するフィードバックを英語で回収する。

令和2-4年度の自己評価の平均値を表6にまとめた。令和2年度は、研修を通じて学習スキル（4.05）と海外の学生との協働スキル（4.32）の向上を実感した参加者が多かった一方で、リーダーシップスキルの向上（3.57）を感じられない学生が多かった。令和2年度は、専攻（人文・人間科学系、社会科学系、自然科学系、生命・医学系）が近い下級生（1-2年生）と上級生（3-4年生）が同じグループになるようにグループ編成することで、上級生のリーダーシップスキル向上を期待したが、このグループ編成では同スキル向上には貢献できなかったようである。そのため、令和3年度より、専攻が近くてスケジュールも合う下級生同士・上級生同士のグループを編成するようにしている。また、令和3年度より、SDGsについてもディスカッションすることを推奨しているが、SDGsの関連知識が増えた（4.14）ことよりも、英語でのコミュニケーションスキル（4.38）や国際協働スキル（4.62）が向上したことを実感した学生が多かった。令和4年度も、令和3年度と同様に、グローバルイシューに関する知識が増えた（3.97）ことよりも、英語でのコミュニケーションスキル（4.34）や国際協働スキル（4.51）が向上したことを実感した学生が多かった。

表6 令和2-4年度参加者の自己評価

令和2年度の参加者の自己評価（回答者36名）	5段階
Overall Improvement in learning obtained from the international study group project.	4.05
Improvements in international exchange and cooperation abilities from the project.	4.32
Improvements in leadership obtained from the project.	3.57
令和3年度の参加者の自己評価（回答者21名）	
Improvements in the knowledge of SDGs	4.14
Improvements in international communication (English ability or using other aids)	4.38
Improvements in cross-cultural cooperation ability (working together on a common solution with respect for cultural diversity)	4.62
令和4年度の参加者の自己評価（回答者35名）	
Improvements in the knowledge of global issues	3.97
Improvements in international communication (English ability or using other aids)	4.34
Improvements in cross-cultural cooperation ability (working together on a common solution with respect for cultural diversity)	4.51

以上より、現在、本研修では、英語でのコミュニケーションスキルと国際協働スキルの向上に焦点を置いて学生のグループ編成や課題設定を行なっている。

表 6 の自己評価にくわえて、自由記述式で本研修に対するコメントも回収しているので、その一部を紹介する。表 7 より、ディスカッションの運営方法についてチーム内で合意形成するまでに時間がかかるケース (*It can be a bit confusing to let our Japanese partner to have the same understanding on how meetings work.*) もあることがわかるが、令和 2 年度の本研修は概ね好評だったといえるだろう。

表 7 令和 2 年度参加者からの本研修に対するフィードバック

I appreciate this great opportunity to discuss with the people from different backgrounds and culture.
It's a great program!
I can listen to different life experiences.
Thank you so much for your great supports!
I like them all because it was really good to share our own opinions and the campus to other (both Kobe U and NTU)
These sessions really help me develop creativity and a deeper mindset!
Brainstorming: we were able to discuss enough since we had plenty of time. It was also good exercise for time management.
It can reach to more people and more relax.
It would be great if we could unite again in face-to-face near future.
Of course, our 10 times basic discussions became the base of my English ability, and thanks to it, I can perform better today, I think.
stimulative and informative.
Be positive, and more participation ! and opinion wanted!
Hope that this activity can last forever :))
I could talk a lot, and enjoy it.
I must keep in touch with NTU friends. Thank you for giving me such a great opportunity.
If there were some rules about the 10 discussion meetings, it would be great. We would have some format to follow. It can be a bit confusing to let our Japanese partner to have the same understanding on how meetings work.

表 8 は令和 3 年度の参加者からの本研修に対するフィードバックの一部である。グループ編成についてフィードバックが 2 件 (*I think it is better to have young NTU student and senior KU student./ It's a little hard for us to discuss or chat together because we do not have some same interests or experiences.*) あったが、それ以外の回答は概ね好評のようである。グループ編成については、令和 3 年度より、専攻が近い下級生同士・上級生同士の空きコマのスケジュールに基づいてメンバーをマッチングさせており、参加者の興味や経験も含めたマッチング作業は行なっていない。しかし、毎年 1-2 グループは参加者同士の親睦が深まり研修後も連絡をとったり、毎年 1-2 名の神戸大学生が長期休暇中に個人的に台湾へ渡航している

ため、今後も参加者の学年・専攻・スケジュールに基づいてグループ編成を行う予定である。

表 8 令和 3 年度参加者からの本研修に対するフィードバック

フィードバック
I think it's a great project that made me had a good experience!
Thanks for holding such a great event, we enjoyed a lot 😊
Please promote this event and carry on this fascinating opportunity.
It was really fun and meaningful for me. Thank you so much to give me this opportunity!
Through the communication with my partner, I get much more familiar with Japanese culture and really enjoy this program.
Hope we can met each other face to face!
提案
Not only students, staffs were really nice. That's why I wanted to work with them more times. How about setting workshops twice in the program? But I cannot argue it strongly, because your work will be too much. Anyway, thank you for your cooperation to make this project much better!!
I hope the activity time can be concentrated a little more, spanning a few months is a bit too long.
I think the required time of discussion may can cut down to 8 times.
I suggest that the program in NTU can be more formal, just like how Kobe university hold the program. Since what I observe is that NTU students did not take this activity really serious.
Great, but I felt NTU student is cleverer than KU student, for me. So I think it is better to have young NTU student and senior KU student.
It would be better to make members who are interested in the same SDGs goal in one group, if it's possible.
It's a little hard for us to discuss or chat together because we do not have some same interests or experiences. If there are any tool or method which can let our relationship deeper, it will be great.
Whole activity is perfect! Thanks for holding this!! But sometimes I want to know other Japanese student besides the member in the group! Maybe we can hold a bigger discussion combined two groups or sth else activity!

表 9 は令和 4 年度の参加者からのフィードバックの一部である。10 回もディスカッションをすることに満足する神戸大学生もいれば、途中で退屈になる国立臺灣大學生もいる。また、国立臺灣大學側でも本プログラムに参加したら単位授与されたいという意見 (*I think that it can be a course with credits.*) が示された。実際に、毎年 1-2 名ほどの国立臺灣大學生が本プログラム参加を様々な理由により途中で辞めている。今後も国立臺灣大學生に対して国立臺灣大學より単位授与される見込みがないため、今後は神戸大学からオープンバッジ (デジタル証明書) を発行し、国立臺灣大學生に授与することで、国立臺灣大學生の動機づけを強化し、本プログラムの安定化を図りたい。

表 9 令和 4 年度参加者からのフィードバック

Compliment	Suggestion
I really enjoyed and improved my various skills! It's a good experience and I will recommend others to try this program. (Kobe U)	Cross-group interactive activity can be held in the middle of this program. Thus, we can have different discussion topics for students from various disciplines. (NTU)
We could enjoy our meetings freely. It is a very precious opportunity to make friends who have completely different backgrounds and speak with them. (Kobe U)	One of the members could no longer participate most of the time, and this took its toll in the preparation and video production. However, with cooperation of the member, I am glad that we were able to make it through to the end. I feel that I have gained a little more patience. (Kobe U)
I love the interaction between students from different countries because some kind of cultural gap can't be realized if you are not discussing a deeper topic with each other. (NTU)	Because NTU students here may change their class schedule because of the change of semester, it may be better to take this into consideration. Due to some cultural differences, it may be better to have two Japanese in the same group, just in case the other Taiwanese students speak too much and are not aware of that. (NTU)
Really thanks to all the partners I've met with, we've exchanged lots of cultural backgrounds, thoughts and opinions on different issues. It made me really enjoyed. (Kobe U)	I think that it can be a course with credits. This way both Japanese side and Taiwanese side can have a better motivation to do their best here. (NTU)
I have been participating in many online programs since 2020 but hands down this one was the BEST so far. (Kobe U)	Regarding the 10 meetings, I think for our group, we kind of reached a plateau on around 5-6 meetings. As there was not enough external stimulus, we just followed the way we usually do, so things pretty much got boring at the end (but still, that was up to us to freshen up though). My suggestion is—we should have information exchange between groups after 4 or 5 meetings (or 1-2) just to let us know what's the best way to hold a meeting. For example, maybe we have a relatively weak meeting structure. But, by seeing the way the other groups have a meeting, that can actually be a really good input as to how we conduct the following meetings. Overall, I love this project a lot! Thanks for your hard work. ☺ (NTU)

(Kobe U : 神戸大学生執筆、NTU : 國立臺灣大學生執筆)

6. まとめ

本研修は第一著者が研究分担者を務めた科研費プロジェクト⁷と Wang and Kihara (2016-2018) を発展させた日台学習プログラムで、コロナ禍前から神戸大学生と国立臺灣大學生をオンラインで繋げてきた。令和5年度で国立台湾大学研修は6年目を迎え、コロナ禍も落ち着いてきたため過去3年度について振り返った。

まず、本研修に参加する神戸大学生が毎年10%ずつ増加していることが確認できた。しかし、3年にもおよんだコロナ禍のため海外渡航歴がない神戸大学生が数多く存在することも明らかになり、今後も継続的に神戸大学生に対する国際交流の機会を提供する必要性があることがわかった。

次に、神戸大学研修生については、交換留学希望者や上級生（学部3年生以上）が熱心にプロジェクトに取り組む姿勢を下級生（学部1-2年生）が間近で見ること、下級生（特に学部1年生）に良い影響を与えているという点は本研修開始当時からみられることではあるが、ここ数年に限っては、アクティブラーニングが日台の学校教育現場で流行っていることもあり、参加学生のグループワークスキル、ファシリテートスキル、振り返り作業の質が年々向上している印象を受ける。また、参加学生による研修後の自己評価でも、知識の習得よりも、英語運用能力と異文化間協働スキルの向上を実感する学生が多かったことから、本研修は参加者自身が応募時に抱いていた動機（2）の通り、学生の高度な英語運用能力と異文化間協働スキルを育成できているといえるだろう。

最後に、本研修への参加を途中で辞める神戸大学生は研修開始以降0名であるが、国立臺灣大學生は毎年1-2名程度が途中で参加をとりやめている点であるが、国立臺灣大學生の参加意欲（engagement）を保つためにも、今後は神戸大学から本プログラムのオープンバッジを発行することから検討していきたい。

参考文献

- 木原恵美子・異智子・濱野寛子（2021）「構文の学習と部分的生産性の条件付け要因の探索的研究」日本認知言語学会『第22回全国大会 Conference Handbook』、pp. 18-30.
- 木原恵美子（2022）「L2 英語学習者による3人会話にみられる繰り返し」『日本認知言語学会論文集』22巻、pp. 426-431.
- 木原恵美子（2022）「L2 英語学習者による響鳴—構文のファンネル構造—」神戸大学創立120周年記念異分野共創国際シンポジウム発表資料
- 木原恵美子（2023）「英語学習者による会話における構文の響鳴とその拡張」日本認知言語学会第23回全国大会発表資料
- 木原恵美子（2023）「中上級英語学習者による3人会話における響鳴」日本語用論学会第

⁷ “Argumentative and Persuasive Discourse in Debating through Collaborative E-learning Projects.” (2016-2019) 挑戦的萌芽研究 研究課題 16K13263 研究代表者 Wang, Marian 研究分担者 木原恵美子

26 回大会発表資料

- 木原恵美子 (2023) 「英語学習者による会話へのグッドイナフ・アプローチ」『認知言語学論考』第 17 巻、pp. 191-212、ひつじ書房。
- 木原恵美子 (印刷中) 「英語学習者による会話における構文の響鳴とその拡張」『日本認知言語学会論文集』23 巻
- 木原恵美子 (印刷中) 「中上級英語学習者による 3 人会話における響鳴」『日本語用論学会大会発表論文集』第 19 号
- 松下佳代 (2019) 「学習成果とその可視化」中央教育審議会『中央教育審議会大学分科会 教学マネジメント特別委員会 (第 6 回) 配付資料』
- Wang, M. & Kihara, E. (2016) “E-Debating for Cross-border Communication and Critical Thinking Skills.” *The Journal of Teachers Helping Teachers*, Vol. 4, No. 1, 156-168.
- Wang, M. & Kihara, E. (2017) “Willingness to Communicate in Debate Settings: Case Study of a Japanese University Student.” *The Journal of Teachers Helping Teachers*, Vol. 5, No. 1, 14-29.
- Wang, M. & Kihara, E. (2018) “From E-debates to Cross-Border Live Debates: Reflections across Borders.” *The Journal of Teachers Helping Teachers*, Vol. 6, No. 2, 72-91.